20260405　イースター礼拝　ヨハネによる福音書20章11～18節

「信じられない再会」

先日、私の友人家族が遊びに来てくれました。この聖日礼拝にも出席してくれて、礼拝後の挨拶もありましたので、憶えている方々もいらっしゃるかと思います。この友人家族の夫婦、どちらも私の大学時代の同級生で、夫の方に限って言えば、私と同じく1年浪人を経て大学に入っていますので、浪人同士、貴重な同年齢の同級生でもありました。そんな夫である彼と、敦賀での夜、互いの妻から許しを得て、数年ぶりに飲みに出かけました。快く送り出してくれた妻たちに感謝すると同時に、賑やかすぎる夜間託児所のような牧師館の様子に後ろ髪を引かれながら、とりあえず本町1丁目方面に歩いていきました。しばらく1丁目を巡った後、「きらく」という敦賀では有名なバーに入りました。「こちらにどうぞ」と案内されたカウンター席には、すでに1組のカップルと一人飲みの男性が座っていました。一人飲みの男性は、どうも旅行者か仕事で敦賀に来た人らしく、妙に人懐っこい隣のカップルと楽し気に話していました。この人懐っこいカップルは、敦賀の魅力を力説しながら、一人飲み男性に敦賀への移住をしきりに勧めていました。私は友人に「あのカップル、めっちゃ敦賀のこと好きなんだな」とか言いつつ、「キミも敦賀教会で洗礼受けてこっち来ないの？」とか口説いたりしていました。

まぁ、そんなこんなで杯を交わす夜は更けていき・・・。そして、どんどん盛り上がる、カップルと一人飲み男性の会話を横で聴きながら、いよいよ気になってしまって、それとなく窺ってみると、カップルの女性の方と目が合いました。その瞬間、私も、そして、その女性も雷に打たれたような状態になってしまいました・・・。いや、別に色っぽい話じゃありません、そのカップル、うちの卒園生の保護者だったんです。名前も言っちゃいますが、中野さんという方なんですけど、お

子さん２人を通わせてくださり、とても幼稚園のことを大切に思ってくれていて、父母の会でも活躍されました。「なんで、こんなところにいるんですか？」と言われて、「えっ、いちゃ悪いんですか？」なんて、丁々発止のやり取りをしながら、誰とも知れない一人飲みの男性と、私の友人と、あとバーテンダーも巻き込んで、敦賀教会幼稚園の話で盛り上がってしまいました。「もう二人とも中学生になったけど、また卒園生クリスマスに呼んでくださいよ！」と言われて「もちろん喜んで！」と答えました。実は、今のところ卒園生クリスマスに誘っているのは、小学６年生までなんですね。でも、その年齢制限を撤廃するのに、これ以上の理由はないですよね。とても嬉しく、とても有難い再会でした。

これは、今年の卒園児のご家庭に向けた園長だよりにも書いたことなのですが、「もう、幼稚園にいる私たち教職員の努力も献身も届かないから、尚のこと、祈るという愚かな、だけど大切な営みを続けて参ります」と常々思っています。卒園する子ども達、そしてご家庭に対して、もう関わることが出来なくなる寂しさを感じながら、でも、最後、祈るという関わり方でもって、これからも末永い幸せを願っている。そんな想いを抱きながら毎年毎回、卒園の時を迎えています。それは、ある意味で、お別れの決意表明でもあります。もう会えない、もう抱っこできない、もう笑い合うこともない。その喪失感を噛みしめながら、でも、それが喜ばしい子ども達の成長の徴だと思って、名残惜しみつつ、餞の、祈りの言葉を紡ごうとする。卒園式の最後に、教職員一同がこの講壇前に並んで、声を揃えて「さようなら」と挨拶します。それは、まさに「もう会えないけど、幸せにね」という宣言だと言えます。

多分、たまたまです。なんの御心も、御計画もないと思います。主の十字架という、イエス様との死別に想いを馳せる受難節に、卒園式という子ども達との決別の時を迎えるのは、たまたまですね、きっと。日本が４月から新年度を始めるという特殊な暦設定しているだけのことです。イエス

様との別れが悲しくて泣いた弟子たちや群衆がいたことと、子ども達との別れが寂しくて涙を流す先生たちがいることは、多分、全然関係がありません。神学的にも、論理的にも、全然関係ないのは確実。・・・それは、確実なんだけど、でも、なんか重なるんです。そこにある悲しさ、寂しさ。だけじゃなくて、御言葉の成就、成長の徴。賛美の声、祝福の言葉。感謝の思い。なんか重なるんです。多分、それは「自分にとって掛け替えのない大切な存在が離れていく」という根っこの部分を同じくしているからだと思います。死別、離別、決別。形や程度は異なりますが、「今まで当たり前に一緒にいた大切な人と、もう一緒にいられないんだ」という経験の本質は変わらないと言えます。大切な存在との別れだから、そこに芽生えるのは、悲しみだけじゃなく、今までに対する感謝の思いや、これから先に対する祝福の願いも織り交ざるというものです。

もう会うことはないでしょう、もう関わることはないでしょう。だから、祈るのです。・・・そんな遠い距離感が生じることに納得して、そういうものだと思って、過ごしていたのに・・・。それなのに、「なんで、こんなところにいるんですか？」という驚きの再会を経験することになるという。それって、とっても嬉しくて、有り難いことですよね。

私は、マグダラのマリアがイエス様に再会したという、今日の聖書のお話を、あまり遠い話にしたくありません。確かに、復活という出来事、蘇りという奇跡は、人智を超えた大いなる御業の実現です。でも、その大いなる御業の、大いなる輝きにかき消されているかも知れない、純粋な再会の喜びに焦点を当てたいのです。私たちは、「復活」や「蘇り」という奇跡的事象に、少々目を向け過ぎていると思います。ことの本質は、もっとシンプルで、奇跡の素晴らしさじゃないし、御業の偉大さじゃない。もっと大事に受け止めないといけないのは、自分にとって、とても大切な人と再会できたこと、もう一度出会えて共に歩んでいる、ということです。

今を生きる私たちキリスト者にとって、何よりも嬉しいことは、今日もイエス様が隣にいてくだ

さるということです。クリスマスという御降誕の出来事も、イースターという御復活の出来事も、どちらも突き詰めた先にあるのは「今日も主が共におられる」という恵みですよね。クリスマスで「初めまして、イエス様」と私たちは挨拶しました。そして、今日、イースターにおいては「また会えましたね、イエス様」と驚きつつ挨拶して、その再会をお祝いするのです。

イースターとは、確かにイエス様の御復活を喜ぶ記念日です。でも、復活したイエス様に出会えなかったから、あまり嬉しくない記念日です。例えば、聖書に「キリスト・イエスは、人知れず復活して、その後も御独りで祈る日々を過ごされた」と書かれていたら、つまらないじゃないですか。復活されたと言うなら、会いたいと思うじゃないですか。だから、実は、復活と言うのは、それだけじゃ不完全で、復活してマグダラのマリアの前に、弟子たちの前に現れたというのが、とても大事なのです。信じられないくらいの、驚きの再会を経験することが、イースターの一番嬉しい瞬間なのです。

私たちもイースターの日を迎えました。復活されたイエス様に出会う日々がこれから始まります。どんな形で出会うのか、どういう経験を通して出会ったと言えるのか。まぁ、それは2000年前に比べると、いささか複雑かも知れませんね。「おっ、そう言えば、昨日イエス様に、そこの交差点で会ったよ」とは行かないのがつらいところです。でも、期待していようじゃありませんか。ふと祈る瞬間に、ふとため息をつく瞬間に、ふと天を仰ぐ瞬間に。復活のイエス様の存在を感じられるかも知れません。絶望する手前で、怒りに飲み込まれる手前で、過ちを犯す手前で。「おいおい、ちょっと待ちなさい」とイエス様の御声が聴こえて来るかも知れません。復活のイエス様は、復活したのだから、私たちの隣にあって、私たちのことをいつも守り、導き、そして、愛してくれています。

そのことを、ちょっと想像しながら、信じながら、イースターから始まる日々を過ごして参りま

しょう。「どうやってイエス様は復活したのか」なんて理屈を考えても、絶対に答えは見つからないので、「なんでイエス様は復活したのか」と考えてみましょう。そして、「きっと、イエス様は私たちを驚かし、励ますために復活されたのだ」と受け止めていたいと思います。私たちに出会うために復活されたイエス様との再会を願いつつ。最後にお祈りいたします。

神様。今日、私たちは、長い受難節を過ごし、ようやく喜びのイースターを迎えることができました。今、改めて思います。何が喜びなのか、と。十字架の死が克服されたことが嬉しいのか。私たちの罪が十字架によって贖われたことが嬉しいのか。嬉しいと長年言われているから、嬉しいのか。今、改めて思います。私たちの命を支え、人生を導き、恵みの御言葉を語ってくれるイエス様が、再び、私たちの隣に生きていてくださるのが嬉しいのだと。遠いところの復活ではなく、難しい理屈を経た復活ではなく、今日を生きる私たちのために、イエス様が復活され、共に歩まれることを、心から感謝し、そして、賛美します。ハレルヤ。再びイエス様と一緒に歩める日々に、どうか豊かな祝福と確かな導きをお与えください。イースターにおける、イエス様との再会に感謝しつつ、このお祈りを、あなたの御前にお捧げいたします。

4 月誕生者の祝福祈祷

聖書：イザヤ書 46 章 3〜4 節

あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

神様。

春の訪れと花々の美しさを感じるこの季節、私たちは4月にお生まれになった方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが生まれる前から、私たちの名を呼び、その人生のいかなる時も、共に歩み、必要な癒しと慰めをいつもお与えくださいました。そして、これから始まる新しい日々においても、あなたのお守りの内に歩んで行ける幸いを感謝致します。4月に生まれた尊い信仰の友人たちの上に、どうかあなたからの豊かな恵みと祝福をお与えください。また、人は独りで生きるのではなく、多くの人たちに支えられ、助けられる中で、その人生を全うしてゆきます。どうか、4月の生まれの方々の周りにいらっしゃるご家族、ご友人をも、あなたが守り導いていてください。あなたの大いなる愛が、すべての人を包み、全き平安で満たされることができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。